

# 特集 社会と共に生きる酪農を目指して

5

酪農を通じて、持続可能な社会に貢献！

## 大切にしたい！ 国産の牛乳・乳製品

これからも日本の酪農家と牛乳・乳製品を守り続けるために 千葉県 切替牧場

今、為替変動による円安や、燃料費・飼料代の高騰の影響を大きく受けている日本の酪農。

そんな状況の中、牛乳・乳製品の生産に日々奮闘する酪農家の思いを、切替宣充さんに伺いました。

### 東京での会社勤めから一転 実家の牧場で就農

切替宣充さんは、千葉県袖ヶ浦市の切替牧場の代表。祖父の義弥さんが開き、父の洋介さんが引き継いだ切替牧場の3代目です。

もともとは牧場を継ぐ気持ちはなく、大学も経営学部に進学し、東京でIT系の会社に就職。しかし、「自分で決裁できない物足りなさを感じ、事業家になりたいと思いました。その時、実家の仕事に目を向けたんですよね」と、5年間のサラリーマン生活を経て、2006年に実家で就農。「搾乳もしたことがなかった」という状態から、牧場の仕事に入りました。

「父とは仕事ではバチバチぶつかっていましたが、牧場に入ったことを喜んでくれていたし、自分のストレスとしては会社員時代に10だったのが3にまで減った感じで、のびのびやらせてもらえました」と振り返っていました。



切替牧場 代表 切替宣充さん

現在は技能実習生のジョマルさんと2人で約40頭の乳牛を飼養していますが、就農当時は、洋介さんと宣充さんに加え、母の順子さん、義弥さん、祖母のますさんも牧場の仕事を手伝っていて、「父と自分で8割くらいの仕事は担っていました。人手があって融通が利くという家族経営の良さがありましたね」と言います。

### 地域の特性を生かし 酪農の可能性を追究

現在、飼料の輸入価格高騰をはじめとする生産コストの上昇で、大きな影響を受けている酪農の生産現場。切替さんは「生産コストが上がると、反映されて乳価も上がるので、そこまで外部要因に影響されないのでは、と思っていましたが、現在の乳価では、コスト上昇分をとってもカバーできない状態。酪農家の努力でコントロールできる領域ではなくなっています」と訴えています。

持続可能な酪農生産のための適正な価格が実現できれば、日本の酪農や牛乳には、まだまだ無限の可能性があると、切替さんは感じています。

「地形や気候に適した飼料を栽培し、特

色あるエコフィードなどで地域特性を生かした牛乳を生産し、差別化して商品開発すれば消費者にも評価されます」と切替さん。

エコフィードは、食品加工の際に出る残渣などを飼料に活用することで、廃棄物削減と資源の有効利用、飼料自給率の向上にもつながります。

「今、沖繩の牧場にいる後輩から頼まれ、1〜2カ月に一度、手伝いに通っています。沖繩はまだまだ利用されていないエコフィードが多い。パインジュースの搾りかす、泡盛かす、ビールかすなど、エサからローカルなものを使い、それをアップルする商品ができれば、沖繩ならではのものとして、観光客などのマーケットの需要もあるはずですよ」

切替牧場でも、地元千葉県の蔵元の酒粕をエコフィードに利用して、「地元のものというだけでなく、与えていると牛の調子がいいんですよ。食欲が落ちた



●切替牧場：千葉県袖ヶ浦市



- 1 牛たちに飼料として与えている、海外からの輸入乾草の前で。右から、切替宣充さん、奥様の綾子さん、四女のかのあさん、長男の三志良さん、三女のらんこさん、次女のはんなさん、技能実習生のドロレス・ジョマル・パレリオさん。
- 2 木立を背にした切替牧場。つなぎ牛舎で約40頭を飼養しています。
- 3 牛に鉱塩を与える切替さん。栄養を補助するサプリメントなども、牛それぞれの状態に合わせて与えています。「うちの牧場はWELL-BEING（ウェルビーイング）、広義の幸福、健康を牧場の理念としています。牛も人も、地域社会も、健康、幸福が実現できるよう貢献したいですね」
- 4 40頭のうち搾乳牛は30頭ほど。朝5時から午後4時半からの一日2回の搾乳をしています。

り、夏バテしたりしないですね」と効果を強調しています。

### 飼料も肥料も地域で循環 持続可能な酪農を実現

切替さんも、以前は飼料を自家栽培していました。2019年に千葉県を襲った台風で刈り入れ機械が倒壊して以来、栽培できていません。

「自家栽培を復活したい思いはありますが、飼料畑の仕事が忙しい夏は、牛が苦手とする暑熱期で健康管理に注意しなければいけない時期に重なり、酪農家だけでその労働量をカバーするのは難しい」と切替さん。

「耕種農家（植物を育てる農家）が作付けた飼料作物を酪農家が利用でき、飼

料栽培が耕種農家の生業として成り立つ条件を整えることが必要だと思います」

また、牧場には地域の耕種農家への肥料の供給者としての役割もあり、牛糞堆肥は飼料畑だけでなく野菜の生産にも活用されています。

「乾草や穀物など海外からの輸入飼料には、輸送のための燃料消費という環境負荷もあり、また国際的な価格高騰はわれわれにはコントロールできない外部要因です。それよりも、地域で生産される飼料や肥料を使えば、地域循環もでき、自分たちでコントロール可能な方法で生産していくことができます。十分な収入となるだけの乳価が保証されれば、無理な過重労働ではなく、持続可能な形で実現することができると思います」

### 酪農家から、牛乳の価値の積極的な発信を

切替さんは「酪農家自身が牛乳、乳製品の価値を発信していくことが大切」とも考え、酪農教育ファームなどの活動も積極的にを行っています。

「学校に向いて、酪農や牛乳について出前授業を行う『わくわくモーモースクール』の活動をしているのですが、実施後には、牛乳や給食の残りが減ると、学校の先生方から言われるのです。生産者からの声は響くのだと感じますね」

「食育」が言われ始めて久しいですが、牛乳や乳製品への知識、情報を求める人は増えていると、切替さんは感じています。

「だから、親御さんはじめ、子どもの食生活を考える人たちにも聞いてほしいですね。牛乳は、子供たちの成長に必要な栄養を豊富に含んでいるから給食に出ているのだという、機能的な重要性なども伝えたいです」

将来的には、自分の牧場で見学者を受け入れたいとも考えています。

さらに、「牛乳は、生産（酪農家）、処理（乳業メーカー）、販売（小売店）の分業で消費者に届けられますが、この三者がもっとコミュニケーションをとればいいですね。連携してPRや商品づくりができれば、いろいろなことができると思います」と、業界のチームワークで可能性を開きたいという希望も、語ってくれました。